

明石とかぐや姫

―『源氏』注釈拾遺のこころみ―

小 嶋 菜 温 子

はじめに

光源氏の物語は、竹取物語の引用をとおして、かぐや姫の原像を内側から解体する。そのことについては別稿に論じた（注1）。“罪なき罪”をえて須磨・明石を流離した源氏の軌跡は、地上にさすらう、かぐや姫の罪と流離の物語にささえられてある。でありつつ、光源氏はいかに、かぐや姫たりえない。かぐや姫は罪を贖い、天へと帰還する。が、光源氏は、無化されず無化しえない罪をかかえたまま、物語を終えるほかないのではないか。流離から復権し、やがて光源氏は六条院王国に君臨する。だが、潜在王権の達成ともいわれる、その後半生は満ち足りていたかという、かならずしもそうではない。一見して華麗な六条院は、じつはあらたな流離の場となるのではなかったか。昇天したかぐや姫とは異なり、彼は彼の“月の都”へと回帰しえない。いうなれば“月の都”を代償として、はじめから六条院はあったということ。その意味は、ゆるがせにしえない。源氏にも“月の都”にあたる桂の院（嵯峨野）という地があった。にもかかわらず、光源氏の物語は、その魂の究極の時空をよそに、六条院王国を舞台とする。そして最後の最後まで、源氏は究極の時空から

遠くある。贖罪しえない罪をたずさえて、六条院にあらねばならぬのだ。壮麗な世界の深層には、罪と流離のモチーフが揺曳している。その意味で六条院とは、あらたな罪と流離の時空であったといわざるをえないのではなからうか。聖なる六条院の原質について、またその主題性について、多面的な読みが要請されてこよう。

本稿では、光源氏とかぐや姫との角逐を、さらに別の角度から照射したいと考える。須磨・明石の流離と、それ以後の復権の物語。光源氏のその後半生は、おおく明石一族の物語と結びあうかたちで展開される。源氏の栄達の過程は、いわゆる明石の王権の物語と表裏につむぎだされたのは周知のことだろう。その明石の物語もまた、かぐや姫引用を内在させるのではないか。光源氏と明石と——ふたつの物語の命運は、竹取引用を巧みに組み合わせることで、絡みあわされていくとおぼしい。あらかじめいうと、かぐや姫引用を介して、源氏と明石の運命は交差し、対極的な帰結へと誘われていく。明石のほうこそ、かぐや姫に再帰するだろう。六条院の面貌もそこでは異なってくるはずだ。明石の側から、竹取引用をさらに検証する。そうすることによって、六条院の物語の多面的な意義は、より鮮明にされうるものと思う。

まず次節では、別稿の補足をかねて、光源氏をめぐる月のコスモロジーを須磨・明石巻に確認する。

一、光源氏と月——流離から復権へ——

光源氏の流離と帰還の物語にとって、月はだいいじな舞台装置であった。いわば月との遠近法にあやつられるようにして、光源氏は流離から帰還へと導かれる。かぐや姫の昇天をあたかもなぞるかのようにして、源氏の流離と復権は語られるのである。重複をいとわず、別稿で省略した点を中心に、引用の詳細を解説することにしよう。

須磨巻の前半、離京まえの段階から、かぐや姫の昇天構造は引用されている。

朝廷にかしこまりきこゆる人は、明かなる月日の影をだに見ず、……

(須磨164) (注2)

光源氏は紫上にそのように語った。失脚したものは、「月日」の光りを見ることは許されまい。闇にかくれて蟄居すべきなのだ、ということだろう。弘徽殿太后が「朝廷の勘事なる人は、心にまかせてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ……」（198）としたことと、ちょうど呼応する。月日の光りを欲びることは、「この世のあぢはひ」を受することである。源氏にはそうすることが許されないはずなのだ。

ところが、光源氏の流離をめぐる物語には、月の光りが欠かせない。たんなる風景としての月もあれば、また心象風景としての月影もある。そしてさらにいえば、竹取引用の月も――。まず、離京に先だつての月の描写からみておくことにしよう。決別のため光源氏は左大臣邸や花散里邸、紫上邸、あるいは故桐壺院の陵をおとずれる。それぞれの場に、月は光りをさしかけているのである。一覧しておこうか。

左大臣邸……有明の月いとをかし……

入方の月いと明きに……

花散里邸……月おぼろにさし出でて……あはれ添へたる月影の……やがて月を見ておはす。……

紫上邸……月出でにけりな。……月影にいみじうをかしげにてゐたまへり……

陵……月待ちいでて出でたまふ。……

源氏をはじめとする人々を、そしてその思いを照らしだす月が随所に見いだせる。ばかりか、その月に、光源氏も擬せられようとするのである。花散里との唱和を書きだしてみる（須磨167）。

（花散里）月影のやどれる袖はせばくともめても見ばやあかぬ光を

（光源氏）行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空ながめそ

「月影」――月の「光」はここでは光源氏そのものを指そう。もちろん源氏は、月と一体化するわけではない。消えゆ

かんとする月のように、光源氏は流浪の旅に赴くのみだ。つぎのごとき独詠もあった。

なきかげやいかに見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる

(須磨174)

故・桐壺院を月によそえて、恋い慕う光源氏。故院もまた、月と近い存在としてある。のちに竹取のコードにのって、光源氏の夢に故院がたちあらわれるだろう。ともあれ、光源氏自身にとって「月」の「かげ」――月光との同化が課題となる。はるかな月をもとめて、彼は彷徨を続けねばならないのだ。

月と、貴種の流離と――竹取引用は、ゆるやかに始動しはじめる。かぐや姫がそうであったように、光源氏もまた、愛する人々をのこして去っていく。須磨そして明石へと。竹取の場合とおなじく、留まる者は悲嘆にくれ、形見の品が悲しみをさらに引きだす。引用の痕跡は徐々にあらわになってくるだろう。とりのこされるのは藤壺・紫上・朧月夜、そして左大臣たち。形見の品の一つめは、かぐや姫のときとおなじく「御文」である。手紙をうけとった人々の嘆きは、紫上のそれに集約されて綿々と語られた。途中を省略して、引いておく。

京には、この御文、所どころに見たまひつつ、御心乱れたまふ人々のみ多かり。二条院の君は、そのままに起きも上りたまはず、尽きせぬさまに思しこがるれば、さぶらふ人々もこしらへわびつつ、心細う思ひあへり。もてならしたまへる御調度ども、弾きならしたまひし御琴、ぬぎ捨てたまひつる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世に亡からむ人のやうにのみ思したれば、……いつまでと限りある御別れにもあらで、思すに尽きせずなむ。

(181-2)

竹取の翁の愁嘆が思い出される。翁は「起きも上がらで」病み臥せったのであった。

「何せむにか、命も惜しからむ。誰が為にか。何事もようもなし」とて薬も食はず。やがて、起きもあがらで、病み臥せり。

(竹取……日本古典大系による。以下同じ。)

紫上も「起きも上りたまはず」にいる。翁と同じく、ほとんど病臥の状態にあると読むべきなのだろう。日頃の調度をはじめ、愛用の琴など、すべて源氏の思い出につながる。「ぬぎ捨てたまひつる御衣の匂ひ」も、また悲しい。

「御衣」——これまた形見として、かぐや姫が地上にのこした品にちがいない。

ぬぎおく衣を、形見と見給へ（竹取）

とした、姫の言葉が響いてくるようだ。形見の衣、その匂いが、紫上の悲しみをかきたてる。まるで光源氏が「今はと世に亡からむ人」のように、つまり故人のごとく思えてしまう。この「今は……」も、かぐや姫引用だろうか。

今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひ出でける（竹取）

姫が帝におくる最後の歌だ。天翔けりゆくものがのこす、最後の思い。そして形見の品にその思いは凝縮される。光源氏の旅立ちには、それとおなじ軌跡をたどっているだろう。紫上の眼前にある「御文」、「御衣」。死別したわけではない。はいえ、流離の途についた光源氏との再会はありうるか。深い嘆きと不安が、紫上の胸中に去来するばかりである。

引用をとおして、竹取の翁たちの悲劇が、あたかも再現されようとするかのようにみえる。が、単純になぞられるだけではない。相違点もある。翁たちには絶望しか与えられなかった。形見はふたつの世界をつなぐすがであるのだが、かつて述べたとおり竹取物語はそれを消去した（注3）。かぐや姫と翁たちの絆、つまり月と地上の回路は、完全に断たれてしまう。ふたつの世界は隔絶されてしまったのだ。しかし、源氏の場合は異なる。形見は形見として、十全に機能しよう。光源氏と人々のあいだは、その形見によって繋がれ続けるのである。竹取とちがって、回路は閉ざされたわけではない。源氏自身も、都への思いを断ち切れるはずがない。昇天するかぐや姫が、もの思いを喪失するのと対称的なのだ。いずれなんらかのかたちで、光源氏は帰還する。その可能性をも示唆しつつ、ここに流離の物語は始まったのであった。

かぐや姫の昇天の杵をとりこむことで、物語は光源氏を流離へとおしだす。と同時に、きたるべき帰還の方途も準備されつつある。さらに引用が重ねられていくことになる。光源氏は須磨に流離した。そのはじめから、物語はもうひとつの昇天を仕組んでいる。須磨でむかえる最初の秋。はやくもそこに、十五夜をながめる光源氏がいる。「遥か」な「月の都」を詠ずる、光源氏がいるのである。その姿は、昇天をひかえた、かぐや姫そのものではないか。

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけり、と思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧やへだつる」とのたまはせしほどいはむかたなく恋しく、をりをりの事思ひいでたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遥かなれども

その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、……

とおく須磨にありながら殿上をおもう。藤壺を慕い、また故桐壺院によく似ていた朱雀帝の面影をたどる。「霧やへだつる」は、諸註いうように、藤壺との唱和による（賢木卷118）。

（藤壺）ここのへに霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやらるる

（源氏）月かげは見し世の秋にかはらぬをへだつる霧のつらくもあるかな

賢木巻で右の唱和がかわされた日は、十五夜でない。「二十日の月」のことだった。その二十日のことをすこし思いだしておこう。光源氏は朱雀帝をおとずれたのち、藤壺と逢い、かつての桐壺朝をしのんだ。先帝后であった藤壺からすると、代がわり後の朱雀朝は縁がうすい。「雲の上の月」のような、とおい世界に感じられても止むをえまい。それを源氏は慰

める。「月かげ」はかわらない、朱雀朝も桐壺朝とかわるところはないのだ、と。自らは藤壺以上に、代がわりによる苦汁を味わっていながら……。そういえば、賢木巻にはもうひとつ、月を慕う光源氏の歌が見いだせる。

月のすむ雲をかけてしたふともこのよのやみになほやまどはむ

(賢木125)

出家した藤壺を月になぞらえて、思慕の対照とする。「月」に対して、源氏は「この世」にある。その対比のなかで、源氏と月の隔たりは顕わであるだろう。

その賢木巻を、光源氏は須磨の十五夜に、回顧するのだ。現体制からはじきだされ不遇の境涯にあって、なお朱雀帝はしたわしいのか。いやそれとも異母兄・朱雀帝をとおして、父・桐壺院がただ追慕されるのか。おそらく、そのどちらでもあり、またどちらでもないとするべきだろうか。皇統への感慨はそれとしてあろう。が、いまはただ須磨という地にあって、追懐する場所があればよい。現実の内裏が問題なのではない。恋慕する時空として、還るべき場としての、はるかな「月」——源氏はそれをひたすら求めつつけるのである。

須磨の月はなぜ、十五夜の月なのか。賢木巻に準じるのなら、二十日の月であってよいはずだ。ひとつには漢詩の文脈があることはいわれるとおりであろう(注4)。とともに、ここでは竹取の引用を読みあわせておこう。十五夜の月にむかう光源氏。「月の顔のみまもられたまふ」そのありようは、昇天をまえにした、かぐや姫そのものののだ。

かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間に月を見ては、いみじく泣き給う。……翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す気色はあるぞ」と言へば、「いかで月を見ではあらん」とて、猶、月出づれば、出で居つつ嘆き思へり。

(竹取)

月を見るなという人間界のタブーにあらがって、かぐや姫はひたすら月を見まもる(注5)。その姿勢を、光源氏はうけ

つぐのだ。源氏の独詠をふりかえろう。「見るほどぞしほしなぐさむめぐりあはん月の都は遥かなれども」——この「月の都」なる言葉も、引用のコードを如実に示す。月の都——これこそは、竹取物語に示された、かぐや姫の故郷であった。

おのが身は、この国の人にもあらず、月の都の人なり。

(竹取)

十五夜に月をみまもる。そして「月の都」を「遥」かにおもう主人公——光源氏は、その流離のはじめから、かぐや姫なのだった。昇天構造が、またもや物語を導く。光源氏は、きたるべき「月の都」への帰還を課題として担わされてしまった。流離の一年目、その最初の十五夜。ここに光源氏の、究極の命題が顕在化したとすべきだろう。

「月の都」を、とおく恋いつつ、光源氏は流浪する。そういえば辺境の地は、はじめから彼にとって、「知らぬ国」であった。須磨の居宅に到着してすぐに、源氏のいだいた感慨はつぎのようなものだった。

…はかばかしうものをものたまひあはすべき人しなければ、知らぬ国の心地して、いと埋もれいたく、いかで年月を過ぐさましと思しやらる。

(須磨180)

また、明石からむかえにきた入道にも、彼は訴えていた。

知らぬ世界に、めづらしき愁への限り見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし、ただ行く方なき空の
(明石223)

「知らぬ国」・「知らぬ世界」と、それに対する「都」。この図式は、地上を「この国」とし、天上(月)を「かの国」とした、竹取のコスモロジーを転倒させたものだ(注6)。かぐや姫よろしく、光源氏は「月」をながめる。「知らぬ国」・「知らぬ世界」からの脱出、きたるべき帰還にむけて。その周辺には、当然のようにして、月がいつも配されることになる。

月いと明かうさし入りて、はかなき旅の御座所は奥まで限なし。床の上に、夜深き空も見ゆ。入り方の月影すぐく

見ゆるに、「ただ是れ西に行くなり」と独りごちたまて、

いつかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし

と独りごちたまひて……

(須磨200)

西に行く月——それは「まよひ」あるく光源氏でもある。「西に……」が道真の漢詩によること(注7)と、その詩にある「左遷にあらず」というフレーズがここに響いていることはいわれるとおりだろう。須磨退去の境遇を、月の運航になぞらえて、しかし源氏は自身の失意をなぐさめられるはずもない。「月の見る」こともはずかしい、現在の我が身はいえ、月と一元化しえないでいるばかりだ。しかも、はるかな月は、光源氏の魂を喚びつづける。

このようにして月と源氏の距離が、たくみに測られていく。月をめぐる遠近法を駆使することによって、物語は光源氏を自在にあやつっていると言ふことができる。

須磨から明石へ。源氏の漂泊の舞台はうつる。暴風雨や落雷などとあわせて、故桐壺院の果たした役割も大きい。その故院の出現には、竹取のコードが関与すること述べたとおりである(注8)。月からの使者の役目になって、故院はあらわれた。「月の都」へと光源氏をむかえるべく、故院は夢枕に立ったのだ。月をめぐるコスモロジーは、いよいよ仕上げにさしかかる。八月十三夜に、明石の娘と契りをかわし、娘は懐胎。そして赦免の宣旨が、流離して二年半たらずで下った。はやすぎる復権であり、源氏の罪は完済されえない。後述のように、またもや形見の品をのこして、光源氏は明石を去ることになる。かぐや姫よろしく、帰京する光源氏をむかえるのは、くしくも八月十五夜の内裏である。それは決して偶然のことではなからう。竹取引用の完結を、そこに見るべきなのだ。と同時に、竹取との差異もまた、顕著ではなかったか。光源氏は、十五夜の月と合一しえたわけではない。また、その罪は無化されきっていない。贖罪をはたして昇

天する、かぐや姫とは対称的なのだ。竹取引用は、罪と流離のモチーフだけをのこした。引用の果てに、光源氏は、かぐや姫の原像から引きはなされてしまえばかりなのである（注9）。

そして復帰後の光源氏については、冒頭にものべたとおりである。「月の都」―桂の院（嵯峨野）を得ながら、結局そこに留まることを許されない。罪と流離のモチーフをかかえて、源氏は六条院にあらねばならない。あらたな流離の時にさまようほかなかったのだ。いよいよ以下では、明石一族の側に竹取引用をさぐり、そうした光源氏の状況を側面から照射することにしよう。

二、出あい ― 反転する求婚譚 ―

「変化の人」―かぐや姫。それが竹取物語の前提としたところだった。「変化」のものとして、彼女は地上に流離する。ために、かぐや姫にとって、人間的な関係そのものが試練となった。結婚という象徴的な事項に、問題は集約される。五人の貴公子たちの求婚を、難題をだすことで回避する。あぐく、帝の求婚をも退けねばならない。昇天にいたるまでの物語は、そのようにして求婚譚に費やされるのだった。じつは、この求婚譚の構造をも、須磨・明石の物語は引用していた。光源氏の流離の物語は、明石の側からすれば、娘の求婚譚にはかならない。つまり、もう一人のかぐや姫が、ここに浮きぼりにされる。明石の娘―彼女もまた、かぐや姫を原像とするのだ。光源氏は、かぐや姫の原像から引きはなされていった。に対して、明石の娘はどうなのか。彼女のほうこそ、かぐや姫にいずれ再帰するはずだ。とりあえず光源氏との結婚までに、引用の跡をたどっていく。

入道の娘については、須磨・明石よりずっと以前に、その存在だけは知らされている。その時点で、はやくも求婚譚のニュアンスが漂っていた。若紫巻。光源氏に家来の良清が、父娘の噂話をするくだりだ。

「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。……かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家、い

といたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、交じらひもせず、近衛中将を棄てて、申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、『何の面目にてか、また都にもかへらん』と言ひて、頭髪おろしはべりにけるを、……」と申せば、「さてそのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらに承け引かず。

『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを。この人ひとりにこそあれ。思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と常に遺言しおきてはべるなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。

(若紫276―8)

そもそも、明石巻から逆算するならこの時に、娘は十歳たらずのはずだ。諸注いうように、結婚問題が取りざたされるのは、不自然の感を否めない。構想のレベルでひきおこされた不整合として、これを説明することもできよう。が、ここでは竹取引用から、解読しておきたいと思う。明石の物語は、かぐや姫の求婚譚から、拒否の姿勢をうけつぐことで始まったのではないか。竹取引用の始動を、この若紫巻に見いだしておいてよからう。

「この人ひとり」――娘ひとりのために、入道は大願をかけている。わが身は沈淪しつつ、「この人ひとり」に託した期待。その入道の意地が、光源氏の流離をよびよせるのだ(第四節に後述する)。良清の噂話にあるように、入道は大臣の家筋にあった。なのに、あえて中将の位を棄て、入道は都から「かの国」・明石に退き(前)国司となった。都には二度と帰らない決心で、出家もしたらしい。その彼が、娘にのぞむもの。それは彼の理想とする結婚であった。容姿も気性もすぐれた娘には、「代々の国の司」などからの求婚がある。にもかかわらず、入道はいっさい受け付けない。「思ふさま」「心ざし」、あるいは「思ひおきつる宿世」。娘には、半端な結婚を許さない、かたくなな意志を入道は貫こうとする。その信念の抛り所については、とおく若菜巻に語られよう(後述)。が、すくなくとも若紫巻の範囲では、唐突の感をぬ

ぐえないにちがいない。なぜならば、かぐや姫の結婚拒否に、その淵源はあるからだ。入道の拒絶の姿勢が、明石巻では、娘自身のものとなる。拒否する女君の物語として、明石の物語は始発したのであった。

明石巻。光源氏との結婚までのプロセスは、求婚と拒否の応酬に費やされる。あきらかな竹取引用からならう。まず、入道が「年は六十ばかりに」、あるいは「老法師」とされるところは、竹取の翁を彷彿とさせる。むろん、入道の妻は媼にあたる。老夫婦と、ひとり娘。そこに、光源氏は求婚者として送りこまれることになる。住吉の神などの導きによって、光源氏は明石へむかえられた。

月日の光りを手に得たてまつりたる心地して…… (224-5)

明石方にとって、源氏は「月日の光り」そのものだった。その「光り」と結合することが、一族の繁栄を保証していく(注10)。明石の娘は、光源氏と結ばねばならないのだ。娘の結婚には頑なだったはずの入道の心が、光源氏に対してだけは開かれる。入道の申し入れをうけて、源氏は使者に文を届けさせる。

内に入りてそそのかせど、むすめはさらに聞かず。……心地あしとて寄り臥しぬ。 (238)

娘はわが身の程を思い、源氏への返歌をしるばかりなのだ。その頑なさは父ゆずりでもあろうが、かぐや姫のそれに遡源されるものといえる。竹取を想起しよう。たとえば、帝の命をうけて、使者・中臣のふさが翁の家を訪れたときのことだ。

「帝の召してのたまはむこと、かしこしと思はず。」と言ひて、更に見ゆべくもあらず。(竹取)

かぐや姫は、帝の権威を否定した。それほどではないにせよ、明石の矜持も低くはない。ただに自らを卑下するのではなかった。文を書きかわすようになり、彼女の「上衆めき」たる風情も強調され、また、

心深く思ひあがりたる気色も、見ではやまじと思すものから、……女はた、なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心くらべにてぞ過ぎける。(240)

とされる。その「思ひあがり」たる気高さは、かぐや姫に通う属性だろう。「心くらべ」を強いられて、光源氏は興味を一層かきたてられる。呼びよせようとするが、娘はそれにも従わない。

「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじと思したるを、正身はたさらに思ひ立つべくもあらず。「いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さように軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん。かく及びなき心を思へる親たちも、世ごもりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ」と思ひて、「ただこの浦におはせんほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそおろかならね。……」など思ふに、いよいよ恥ずかしうて、つゆもけ近きことは思ひ寄らず。(243-4)

都人の気まぐれで、光源氏は「軽らかに」言い寄るのではないか。「口惜しき際」、「人数にも」入らぬ身の程を考えて、娘は源氏に近づくまいとする。なまじ関われば、自分が「いみじきもの思ひ」をする羽目になり、期待をかけた親もまた結局は「なかなかなる心」を「尽く」すことになる、と。この思慮は、かぐや姫が貴公子たちの求婚に対して述べた感慨と重なるう。

よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを、と思ふばかりなり。(竹取)
「深き心」での求婚かどうか。関わったあとで「くやしき事」を味わい、後悔したくはない。かぐや姫は、そこから難題の提示へとむかい、貴公子たちの求婚をはねかえしていった。明石もできれば拒絶の姿勢を貫きとおしたい。

が、明石の抵抗はそこまでである。娘には、提示すべき難題はなかった。竹取物語との差異は、決定的である。「御文

ばかりを聞こえかはさむ」ことを願ったが、明石にはそれは叶わない。かぐや姫はなるほど帝の求婚をも退け、「御文」を「聞こえかは」しあう関係だけをもちえたのだが。

かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通わせ給ふ。御返り、さすがに憎からず聞こえかはし給ひて、おもしろく、本草につけても御歌をよみてつかはす。（竹取）

かぐや姫と帝のように、光源氏と距離をおいた親交を続けられたら――。明石のその願いも、結局はむなし。拒否の姿勢は、もろくも突きくずされてしまう。光源氏を婿としてむかえることは、もはや明石一族にとって至上命令なのであった。入道の決定は、絶対である。かぐや姫をついに御しきれなかった、竹取の翁とは違うのである。明石の娘の結婚は、入道の主導により、実現されるのだった。

忍びてよろしき日みて、母君のとかく思ひわづらふを聞きいれず、弟子どもなどにだに知らせず、心ひとつに立ちゐる、輝くばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたらしい夜の」と聞こえたり。（244）娘ばかりか、母君つまり入道の妻も「思ひわづらふ」のであって、この結婚に不安がないわけではない。が、とにかく、入道の独断で、光源氏との婚姻は成立してしまった。「輝く」ほどに準備され、「十三日の月」のもとで――。月の光りに包まれて、明石と光源氏は結ばれる。やがてふたりの間には姫君（のちの中宮）が誕生するだろう。明石一族は、そのようにして、「月日の光り」を我がものとするのだ。

明石の王権の物語のために、かぐや姫の求婚譚は巧みに機能したといえよう（注11）。頭初の拒否のベクトルを反転させることで、一族の栄華は方向づけられた。娘は、かぐや姫にいま一步徹しきれない。明石巻の範囲では、かぐや姫のよきな「変化の人」でありつづけえなかった。逆に当面は、人間の女君としての苦悩が、彼女を待ちうけている。かたや光源氏はいえ、かぐや姫よりしく、明石の地を離れ都に復権することはした。明石たちは、ひとまず置きざりにされた

竹取の翁たちの悲哀を味わわねばならないのであった。

いまのところ、かぐや姫にちかいは光源氏のほうだろうか。明石は、求婚譚の範圍において、かぐや姫と袂をわかつかにみえる。だが、やがて、光源氏と明石の運命は、逆転しよう。嵯峨野から六条院へ——その過程で、明石のほうこそ、かぐや姫の原像へと再び回帰するのではないか。“月の都”への回帰。明石にもその命題が徐々にのしかかってくるようなのだ。

三、別れと再会——月の嵯峨野——

源氏は、昇天するかぐや姫として。そして明石は、とりのこされて苦悩する人間として。源氏の帰京にともなう別れの場面において、それぞれの役割は自明だろう。竹取引用もまた、あらわだ。光源氏は、かつて紫上にそうしたように、明石にも「形見」をのこす。

「琴はまた掻きあはするまでの形見に」とのたまふ。……

逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変はらざらなむ

この音違はぬさきにならずあひ見む」と頼めたまふめり。

(明石256)

琴の琴を「形見」として、再会を約す。その品が喪われることがなければ、明石は源氏とかならずや巡り合える。前述のとおり、竹取では形見は消失される。が、光源氏の物語は、その竹取のコードを反転させて、訣別から再会への筋立てを導きだすのである。形見の品は、もうひとつある。「御衣」をも、源氏は女君に託す。

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を

とて、「心ざしあるを」とて、奉りかふ。御身に馴れたるどもを遺はす。げに今ひとへ忍ばれたまふべきこと添ふ

る形見なめり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかが人の心にしめざらむ。(258)

形見の「御衣」——かつて紫上にのこされたものだった。第一節に見たとおり、御琴などにまじって、「ぬぎ捨てたまひつる御衣の匂ひ」が、源氏をしのばせた。よすがを得て紫上は、きたるべき光源氏との再会を待ち、やがてそれは叶えられる。いままた明石も「御衣」の「匂ひ」をはじめとする形見の品々に源氏をしのび、喜びの日を待つことになるのだ。竹取からの脱却は、またもや準備されたといえるだろう。

明石たちの嘆きは、永遠につづくのではない。むろん娘や母の愁嘆は、ふかい。入道自身にしても、動揺はなほだしいるものがある。竹取の翁たちの惑乱は、確実にその場面に響いている。入道は光源氏に「心の闇はいとどまどひぬべくはべれば……」と語った。(259)

人の親の心は闇にあらねども子を思はぬ道にまどひぬるかな (後撰集 兼輔)

に抛り、源氏物語中に多くみられる発想——親子の情愛による迷い——ではある。とともに、この「まどひ」はいうまでもなく、竹取の翁の「まどひ」とも重なる。つぎのような描写なども、まさしく竹取の翁を彷彿とさせる。

……いとどものもおぼへず、しはたれまさる。起居もあさまじうよろぼふ。(259)

かぐや姫の昇天をまえにして、竹取の翁は老いかがまっていたではないか。

この事を嘆くに、髭も白く、腰もかがまり、目もただれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ふには、片時になむ老になりにけると見ゆ。(竹取)

「かがまり」、「老」になってしまった翁。明石入道の「よろぼふ」姿には、その竹取の翁像が二重うつしになってこよう。入道も翁のように、姫をうしなって病みふせてしまふかにみえる。だが、いささか様子はちがってくる。「ただ涙に沈めり」とされる娘に、

思ひ慰めて、お湯などをだに参れ。……

(260)

と気づかないながら、入道自身も相当に参ってはいた。薬湯など意味のないことは、竹取がすでに物語ったことでもある。

薬もくはず。やがて起きもあがらずに病み臥せり。(竹取)

翁のように、「病み臥せ」るほかないはずだ。入道自身も病臥すべきところだ。が、意外な方向へと、物語は転じていくらしい。

……いとほしければ、いとどほけられて、昼は日一日寝をのみ寝くらし、夜はすくよかに起きあて、「数珠の行く方も知らずなりにけり」とて、手をおしすりて仰ぎゐたり。弟子どもにあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片そばに、腰もつきそこなひて、病み伏したるほどになん、すこしもの紛れける。

(260-1)

「病み伏したる」のは、竹取のコードそのままだろう。にしても、「ほけられて」とされる、入道の自失ぶりは竹取の描きえなかったことである。数珠をなくしての勤行といい、弟子どもに馬鹿にされての行道といい、じつに生き生きとした筆致がうかがえる。“戯画的”で“滑稽化”されていて、ゆえにまた“真実味”を感じるべきだろう(注12)。また「腰もつきそこなひて」は、かぐや姫の求婚者の最後のひとり、中納言が「腰をつき」死にいたる事件を想起させもする。不吉な予感をあたえつつ、しかし、竹取にはない余裕がここにはあるだろう。竹取との差異は、「すこしもの紛れける」とする落ちの部分で決定的となる。最後にきて入道は、翁像から離れるのではないか。病臥のすえに悶死するかというようなことは起こらない。逆に、入道の憂悶は解消されようとするのである。竹取にはない救いが、ここにはあるといえよう。竹取の描いた、絶望的な地上の惑乱は、ここでは無化されてしまったのだ。

明石の物語の大団円にむけて、翁は立ちなおらねばならない。入道のこの姿は、ありていにいえば、その後の翁のそれ

とすべきものだろう。きたるべき再会にむけて、物語はすでに始動しはじめている。竹取引用が、あらたな角度から注目されてこよう。こんどは明石の娘を中心に、もうひとつの昇天構造が仕組まれてくるのである。

昇天するかぐや姫——それが明石のあらたに荷なう役割であった。光源氏との再会が、松風巻に語られる。入道をのこして娘は、若君をともない母と三人で明石を去った。大堰（嵯峨野あたり）が、とりあえずの住まいである。

なかなかもの思ひつづけられて、捨てし家ゐも恋しうつれづれなれば、かの御形見の琴を掻き鳴らす。

（松風398—9）

あの「形見」の琴を奏でる明石。光源氏は、その形見の糸にたぐりよせられるようにして、やがて大堰を訪れよう。つぎに見るように、「形見」は隔たっていた二人の距離を一気にちぢめる。入道と、また明石の浦と別れたことの悲しみ、そして将来への不安。明石の憂愁はそれとして、ともかくにも光源氏との関係はあらためて結びなおされた。あとは、光源氏のもとへ、六条院へと引き取られるのを待てばよい。若君を中心とした、明石一族の繁栄が、ここに見とおされてくるだろう。明石の栄華の物語は、確実に築かれつつあるといえる。そして「月の都」との同化が、あらたな命題として、明石の側にも浮上するのだ。

月の明きに帰りたまふ。

ありし夜のこと、思し出でらるるをり過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。

（403—4）

「月」の光りのもとでの再会。「ありし夜」——明石での十三夜、ふたりの結ばれた記念すべき、「月」の夜。明石は光源氏と、「月」にみまられるようにして、再びめぐりあったのだった。「月の光り」あふれる、嵯峨野。「月の都」にもっとも近い、究極の場が、桂の院を中心とする嵯峨野の地であった。光源氏からみれば、かぐや姫に再帰できる唯一

の時空だったのだ（注13）。その大事な空間で、明石と源氏は再会した。光源氏は、やがてこの大切な場所から去らねばならない。かぐや姫になりきれないまま、“月の都”から遠く、六条院にあらねばならない。源氏にとって嵯峨野はまた、かぐや姫との決別の場所だったといつてよからう。ところが、明石にとって、この嵯峨野は逆の意味をもつのではないか。明石は、嵯峨野での再会を契機として、かぐや姫像へ再帰していくだろうからだ。

このかぐや姫引用は、明石の浦を去るときからはじまっている。すこしだけふりかえっておこう。父・入道と永遠の別れ。そのくだりは、かぐや姫の昇天さながらに語りなされていた。

親しき人々、いみじう忍びて下し遣はす。のがれ難くて、いまはと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、入道の心細くて独りとまらんことを思ひ乱れて、よろづに悲し。

（松風391）

光源氏は、「人々」をむかえに寄越した。その人々の役割は、かぐや姫をむかえにきた天からの使者に相当するだろう。「のがれ難くて」には、かぐや姫が使者のことを

許さぬ迎へまうで来て……（竹取）

としたニュアンスが響く。また、「いまは」、そして「あはれ」なる娘の「思ひ」には、昇天を前にした、かぐや姫の歌が重ねあわせられよう。前引した歌であるが、もう一度書きだす。

いまはとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひ出でける（竹取）

かぐや姫は最後に、地上の“惑い”、“あはれ”に心を乱した。「思ひ乱れて」明石の娘も明石の浦をさらねばならないのだ。明石の入道にとって、いや一族にとって、この決別は避けてとおれない試練だった。一族の王権の物語に不可欠の、いわば犠牲にすぎない。若君を連れて、娘は都へ去る。それは一族にとっては、本然への帰還を意味する。かぐや姫の昇天構造がここに、呼びこまれてくることになるのだった。

世の中を棄てはじめしに、かかる他の国に思ひ下りはべりしことも、……

(松風394)

国司として明石に定住しはしたが、本来そこは「他の国」だった。はやく若紫巻で噂されたように、大臣家にありながら地位を棄て、この「他の国」へと流離した。それが明石の一族の素性であった。この明石の来歴は、光源氏の流離と復権のモチーフを照射し、異化する(注14)。一族もまた、「他の国」での流離を断ち切り、「月の都」へ復帰せねばならないのであった。光源氏がそうであったように――。

若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、……

(393)

君たちは世を照らしたまふべき光りしるければ、……

(395)

「光り」に、明石の一族の悲願は託された。娘と若君の将来は、この「光り」に導かれ栄耀をきわめるであろう。それは、かぐや姫の「光り」でもある。もちろん羽衣を着たとたん、「もの思ひ」を喪失するようにはいかない。しかし、本人のあずかり知らぬところで、明石はかぐや姫の原像へと押しもどされつつあったのだ。

光源氏と再会した明石の様子はどうかだ。

たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。

(406)

明石の身の程は、自らも卑下してやまないものだった。その出自は、たとえ姫君が后となり国母となろうとも、明石一族についてまわる。そのいっぽうでしかし、明石に備わった、そこはかとなない気品、高貴さも折りにふれ強調されていく。「皇女たち」にもなずらえられるほどの美質は、明石のもってうまれた「光り」なのだといえるだろう。

拒否するかぐや姫から、苦悩する人間へ。そしてふたたび昇天するかぐや姫へと、明石の役割はめまぐるしく転じた。光源氏との出会いと別れ、そして再会へと。求婚譚および昇天の構造を組み合わせて、そのストーリーは仕立てあげられたのである。明石の栄達への道筋は、幾重にもはりめぐらされた、竹取のコードと戯れることで開かれていくといえる

(注15)。嵯峨野からさらに六条院へ——。一族の物語は、いよいよ佳境にさしかかる。光源氏は、嵯峨野という「月の都」を喪失した。が、明石は、六条院のかたに、「月の都」を見いだすことになるのではないだろうか。

四、若菜巻の明石——「変化のもの」へ——

源氏との再会ののち、やがて明石の母娘たちは、六条院にむかえとられる。明石の方はひっそりと、しかし確実に光源氏の女君たちの一員としての座を占めていく。第二部・若菜巻。明石所生の姫君は東宮妃となり皇子を産み、祖父・入道の大願成就の日がおとずれる。一族の流離には終止符がうたれることになるのだ。

東宮女御となった姫君の出産は、とどこおりなくすんだ。内裏をはじめとする産養が盛大におこなわれ、明石女御の威信は、いよまさる。明石方はけっして表だつことなく、女御の養母である紫上を終始、立てている。そうすることで、女御の位置は安泰となりえたのである(注16)。明石の入道は、ことの次第を伝えきき歓喜する。本願の叶ったいまは、いよいよ山に入り俗世を離れることができるのだ。六条院へ、最後の消息が書きおくられた。そのなかで、一族の悲願について、そしてその成就についての思いが語られるのであった。そもそも明石の方が誕生するにあたって、入道は瑞夢を見たという。有名な、夢語りだ。

わがおもと生まれたまはんとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光りさやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下に隠れて、その光りにあたらず、……

(若菜上105-6)

聖なる須弥山を右手に捧げた夢。そしてその須弥山から、「月日の光り」が世を照らすという夢。それを瑞祥として、娘を明石の浦に慈しみ育てた。その心に、多くの願をかけてきたのだ。

若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはん世に、住吉の社をはじめ、はたし申したまへ。

ひかり出でん曉ちかくなりけり今ぞ見し世のゆめがたりする

(107)

住吉の神の導きで、光源氏にめぐりあえた。明石巻に見たとおり、「月日の光り」は光源氏によつてもたらされたのだつた。むすめと源氏のあいだに恵まれた姫君は、いま皇子を無事出産した。いずれ、「国の母」となることは確かだろう。瑞夢を頼りとした、大願は成就されるにちがいない。「月日の光り」に導かれた明石一族の、満願は約束されたのである。「ひかり出でん……」の歌は、仏教的な発想によつてもいよう。とともに、一族の「月日の光り」を信じつづけ、ついにその実現を確信し得た、入道のこの世での満足を如実にあらわすものであるだろう。

流離の一族の物語は、栄達をもつて閉じられる。それが明石の王権の物語の帰結であつたことは言うまでもない。その栄華は、皇権と表裏にあるはずだ。ただし、明石を導いた論理からいえば、皇権じたいが問題なのではない。帰還すべき「月の都」があれば、それでよいはずだ。竹取引用もまた、この入道の手紙において、完成されるとおぼしい。

ただわが身は変化のものと思しなして、老い法師のためには功德をつくりたまへ。(107-8)

「変化のもの」——それは、たんに明石の数寄な来歴を言うのではないだろう。「変化のもの」こそは、かぐや姫にあたえられた、名誉ある称号ではなかったか。竹取の前提ではなかったか。

我が子の仏、変化の人と申しながら……

変化の人といふとも、女の身、持ちたまへり。……(竹取)

娘・明石の方にむかつて入道は最後に、「変化のもの」、かぐや姫たれと言ひのこしたのだ。「老い法師」たる自らは、明石巻にも見たように、竹取の翁そのものである。悲願達成の極みにおいて、明石はかぐや姫の原像に再帰させられた。かぐや姫の昇大構造は、ここに完結したといえるだろう。「変化のもの」として、明石は六条院の物語に据え直されたのであつた。

かの先祖の大臣は、いと賢くあり難き心ざしを尽くして朝廷に仕うまつりたまひけるほどに、ものの違ひ目ありて、その報にかく末はなきなりなど、人言ふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも、そこらの行ひの驗にこそはあらめ。

(120)

光源氏の言葉からはじめて知らされることだが、明石の先祖の大臣には「ものの違ひ目」があった。その「報」いで、一族には「嗣なし」という状態であった。が、皇子の誕生を見たいまは、その報いも晴れたことになる。光源氏の言うとおり、それも仏道修業の賜ではあろう。「月日の光り」を信じ、ひたすら大願をいだきつづけた、入道の意志がもたらした結果でもある。が、さらにいえば、竹取の磁場をはりめぐらした、物語の当然の帰結にはかならないのではあるまいか。明石一族の「報い」、いいかえれば「罪」は、こうして無化された。竹取のかぐや姫がそうであったように、罪は完済され、あるべき「月の都」へと帰還しうる。明石は「変化のもの」に回歸しえたのだ。それは光源氏のありようと、いかにも対称的ではないか。

横さまにいみじき目を見、漂ひしも、この人ひとりのためにこそありけれ……

(121)

光源氏の感慨である。「この人ひとり」とのつぶやきは、とおく若紫巻の入道の思いと響きあおう。第二節に触れたくだりを、いま一度想起したい。

わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ。……

(若紫278)

沈淪の入道にとって、「この人ひとり」——娘だけが生きが이었다。そして光源氏は今知った。自らの流離は、「この人ひとり」——明石の姫君のためのものだったのだ、と。須磨・明石に「漂ひ」、苦難を強いられた源氏。そして、復権から、六条院王国の建設へと。その道筋は、明石一族のためのものであったということ。——「他の国」にさすらった明石一族。その流離の物語は逆にいうと、光源氏の流離の物語ときりむすぶことによって、終止符をうちえた。拒否する天女から、苦悩の人間へ。そして再び、昇天するかぐや姫へと、明石はその役割を目まぐるしくかえる。そのはてに、変

化のもの”として定位された明石。その一族は、六条院のかなた、“月の都”へと同化していくのである。罪と流離の無化―それが明石の王権の物語の帰結なのだった。

光源氏の状況が、ここにまざまざと照射されてくる。明石にとって六条院が、“月の都”への回路たりえたとは―。光源氏の状況は、イロニカルに照射され、異化されずにおくまい。源氏といえば、六条院にあって、“月の都”から隔離される。彼にとっての“月の都”―究極の嵯峨野から遠ざけられたままなのだ。壮麗な栄華の王国、六条院には、はじめから罪と流離のモチーフが揺曳している。光源氏にとって六条院は、あらたな流離の時空であるほかない。無化されず、無化しえない“罪なき罪”を、いわば原罪のようにかかえて、源氏は聖なる六条院にさすらうのだ。かぐや姫たろうとして、ついにかぐや姫になりきれない光源氏。彼は、かぐや姫の原像へと再帰しえず、人間的な苛酷な生の軌跡をたどるばかりだろう。無化されない罪と流離―それが光源氏の王権の物語の原質にはかなるまい。

明石と光源氏は、竹取の磁場によって関係づけられた。そしてそれぞれに、かぐや姫の原像と戯れる。その結果、ふたつの物語は帰結において、あざやかなコントラストをえがきだしたといえよう。と同時に、六条院王権の論理の原基が照らしだされるのだった。聖なる六条院は罪と流離を揺曳する、両義的な時空として浮かびあがる。ここに第二部のあらたな問題が浮上してくるはずだ。柏木・女三宮の物語。それが、明石と光源氏の物語と、いかに接合するかについては、別に論じた（注17）。六条院の物語の終局にむけて、光源氏主題はさらに多面的に追求されるだろう。以上では、引用表現に増幅されてのプロセスの一端を、確かめたつもりである。

注

1. 拙稿「光源氏とかぐや姫―須磨・明石そして桂へ―」（『文学』1991予定）。
2. 源氏物語の本文は、日本古典文学全集による。巻名・頁数は適宜示す。

12. 全集の頭注。
13. 拙稿（注1）。

14. 前述のとおり、光源氏にとっても須磨は、「知らぬ国」「知らぬ世界」である。

15. 光源氏との別れ、および入道との離別のプロットを、竹取の昇天構造と対照する。

源氏との離別は、源氏の側からすると、復権のプロットにあたる。別稿（注1）の対照表を合わせ読みたい。

	竹	取	明	石
プロット	昇天	別れ（源氏の復権・帰京）	別れ（明石の上京）	
舞台	地上	明石	明石（他の国）	
人物	かぐや姫 翁・媼・帝	光源氏 入道・母・娘	明石の娘（・母）	入道
媒介項	使者 形見（文・衣・葉）	故桐壺院・つきげの駒 形見（琴・衣・若君）	親しき人々	×
テーマ	姫の思い―喪失 罪―贖罪	源氏の思い 罪	娘の思い 報い（若菜巻）	↓ 消失
エピソード	富士の煙り―断絶	嵯峨野での再会	永訣↓変化のもの（若菜巻）	

※ゴシックは留意事項。

16. 阿部秋生『源氏物語研究序説』1960。

17. 拙稿「女三宮と明石―メタファーとしての産儀から―」（『国語と国文学』1991予定）。

補 1. 注1に記したように、本稿は「光源氏とかぐや姫―須磨・明石そして桂へ―」（『文学』1991予定）と一部重なり、補いあうものである。

2. 本稿は、1989年度、文部省科学研究費（奨励研究A）による成果の一部である。